

鷹の話（五話） = = = 三州横山話より

鷹の眼玉

鷹の眼玉は黄疸の薬といって珍重しますが、また、眼病の霊薬とも言います。これを用いるには、薬鐘に水を入れ火に掛けて、その上に眼玉を糸で吊るしておく、水が煮立つにつれて、湯気がかかって、眼玉から垂れた滴で、中の湯が黄色に染まるから、それを飲ませると言います。

鷹を撃つ方法

鷹を撃てば、その家が一代続かぬと言います。猟師が鷹を撃つ方法だといって、こんな話があります。まずふだん鷹の休む樹を見つけて、その傍に穴を掘って、それに抜け穴を造っておいて、樹の枝には鷹の好む兎や猿の肉を吊るしておいて、穴に隠れて待っているうち、鷹が来ると、その肉を一口食べてみて、二日目には提げて行こうとするものだそうですから、その呼吸を計って、どすんと放すや否や、鉄砲を放り出して、後をも見ず脱け穴へ身を避けると言います。かならず雌雄二羽いるもの故、片方の鷹が撃つとほとんど同時に穴の口へ襲って来ると言います。

鷹の羽蔵

鷹の羽蔵を発見すれば、夫婦差し向かいで、一代左団扇で暮らせるなどと言ったそうですが、それは深山の岩石の聳えているようなところに、岩と岩との間の雨や風のかからぬところに、きれいに羽が積み重ねてあると言います。鷹は自分の体から脱けた羽は、みんなそこへ持って行って蔵しておくので、それを見つけたときは、鷹の留守にそっと出かけて行って、積んである下から少しずつ抜いて来るのだそうです。四〇年ばかり前、鳳来寺山にあるのを発見したものがあつたそうですが、遠くからは羽の積んであるのが見えていても、険しい場所で近づくことが出来なかったそうです。

クラマの鷹

明治二〇年頃のこと、北設楽郡名倉村〔現、設楽町〕の鎮守の森へ、鳥とも獣ともつかぬ、奇怪なものが来て、樹の枝に留まったまま、じっとして、幾日経っても動かないので、村のものが怪しんで鉄砲で撃ち殺してみると、そ

れは大変年をとった鷹で、羽に鞍馬という文字が現れていたと言いました。

鶏を襲う鷹

鶏が鷹に襲われたときは、かならず雄が殺されて、雌は助かると言いますが、それは雄が雌をかばって、鷹と闘うからだと言います。山口文吉という人が、鷹と闘鶏と盛んに格闘しているのを実見したときは、三〇分も争っているうち、闘鶏の勢いが猛烈なため、鷹も諦めて逃げて行ったそうです。もっともそれは小さなマグソ鷹だったと言います。

私が子供の頃、家の鶏の雄が鷹に襲われたことがありまして、家のものが発見したときは、もう背中を食い破られて、そこから腸を引き出して持ってゆきましたが、鶏はじっと地に坐ったまま、まだ生きていました。